

ク下守リケルニ片岡八郎矢田彦七アラ熱ヤトテ頭巾ヲ脱テ側ニ指置ク實ノ山伏ナラキバサ
 ガヤキノ跡隠ナシ兵衛是ヲ見テゲニモ山伏ニテ御座ザリケリ賢ゾ此事申出タリケルアラ淺
 猿此程ノ振舞サゴソ尾籠ニ思召候ツラント以外ニ驚テ首ヲ地ニ著手ヲ束テ疊ヨリ下テ蹲踞
 セリ

〔燕石雜志 五下〕風俗或問 亦問男子の月額剃ことはいつれの御時にはじまりし答云月

額は内兜を透せん爲に梶原景時がはじむといひ傳へたれど慥なる所見なしいつれにも鎌

倉將軍のときに起りしならん太平記卷の五大塔宮熊野落のとき戸野兵衛をたのみ給ふ段

に中略月額の跡かくれなし云々月額の事物に書たるはこれはじめ歟友人修靜菴ぬしの説

にさかやきは馬をよく見せん爲にその毛を焼ことあればそれに擬して扱毛焼といへるな

らん月額の二字は莊子の馬蹄篇に見えたりといへり今按ずるにさかやきは頭毛焼なるべ

し頭をさきと讀り鶏頭の和訓とりさきのりを略じきをかに通はしてとさかといふ如くさ

きのきを略しけをかにかよはしてさかやきと唱月題の二字を當たり今俗は月代と書その

義いよく遠し中略かれば男子のさかやきも昔は五寸ばかり残して俗に立髪と唱今百

日鬘と唱る類古畫に見えたり

〔貞丈雜記 人物〕一月代を剃る事京都將軍の比まではなし皆總髪也又もとゞりをわくる事な

し茶せん髪なりゑぼしかぶる爲なり今の如くわげをしてはゑぼしかぶるにわるきなり或

説に砂石集に月代と云ふ事見えたれば鎌倉時代より月代はありし事なりといへりされど

も古は常に月代剃りたるにあらす久しく打ちつゞきたる合戦の時常にかぶとをかぶり氣

のばせて煩ふ事あるによりて頭の上を丸く中ぞりをしける也其の形月の如く丸く白くな

る故つきしると云ひしなり月白と書くべきを今は月代ツキノロと書くなりつきまろの事をさか